上野ゼミ文献発表:
Judith　Butler『ジェンダー・トラブル～フェミニズムとアイデンティティの撹乱～』
第一章(p19～73)

1. Judith Butler の紹介と、本文献の学問的位置づけ

Judith Butler は、カリフォルニア大学バークレー校の修辞学及び比較文学の教授。1984 年にヘーゲル哲学で博士号を取得。Butler の学問的な功績は、フェミニズム・ジェンダー研究に行為体 agency と遂行性 performativity いう概念装置を組み込み、既存権力構造の単純な反復と再生産から抜け出す理論的な武器をそれらに付与したことにある。agency という概念は、フーコー・デリダ的な脱構築的な言説分析に見られるような主体 subject の構造従属性を克服すべく考案された概念である。agency 概念は、subject の能動性を説明し、主体を言語が行為遂行 performative する場として捉える。Butler は、言語が行為遂行する際、引用 citation が行われていると考えた。発話 parole は利用可能な資源が限られているが、引用は完全な反復ではなく、引用が行われる文脈 context もその都度変化するので、新たな異本 version が誕生する。その結果構造は反復し、再生産されつつも形を変えてゆく。つまり、agency は構造の再生産とその変容を理論装置に含む概念であり、思考し行動する行為主が、いかに既存の権力構造に従属しているか、それと同時に、あるいはその結果として、いかに権力構造を再生産・置換しているかを説明するものである。「社会に従属している主体が、社会を変革する契機は、どこに見出しうるのか？」という社会学的問いに一つの解決視点を付与しうるのが、この agency と performativity という概念装置である。

2. 本文献に対する反響と批判

A:反響…「アイデンティティ・身体性の捏造の系譜」に関する考察や「生物学的性差に基づく性の二分法」の徹底的な解体・脱中心化を行った本文献は、著者の Butler を世界的な理論の寵児にし、その後のフェミニズムやジェンダー研究を大きく塗り替え、社会学・政治学・哲学・文学・思想等、様々な分野に影響を与えた(とされている)。中でも、フーコーの権力理論の限界(権力に影響されない自己の「主体性」に拘れば拘るほど、既存権力との関係に従属してしまうような、循環論法的カラクリ)のいくらかを克服し、精緻な理論が政治的実践に応用できる可能性を切り開いたことの学問的意義は、大きい。

B:批判…Butler に対する批判の中心は、同じフェミニストの N.Fraser や S.Benhabib による「主体への懐疑が、既存権力に対する対抗的アイデンティティの形成を無効にする」というものである。実践・運動の基盤を根底から揺るがしかねない「主体」への問題提起は、フェミニスト活動家にとって、できれば避けて通りたい問題だったのだろう。主体概念の再考を促した Butler の議論は、フェミニズム理論の展開に大きく寄与しつつも、フェミニスト活動家からの根強い戸惑いや反発を受けており、理念と行動を橋渡しするはずの理論が、かえって両者を分断してしまう、という逆説的な状況を引き起こしている。

また本文献に対する外在的批判として、もっとも目立ったのは、Butler の文体の「読みづらさ」に対する批判である。「難解」「悪しき脱構築の見本」「非政治的」「悪文」等各方面から批判されている。これに対して Butler 本人は「普遍性を僭称する『共通文体』『常識』が有する暗黙の前提への異議申し立て」と応答している。

3. 本文献の意図と達成

本文献の意図、すなわち Butler が本文献においてもっとも関心を払っていることは、根底的な基盤とされている身体性の捏造の系譜を明るみに出すことである。身体性の捏造の系譜、すなわちセックス(生物学的性差)やセクシュアリティが社会的な構築物である、ということは、これまで理論化されてこなかったわけではない。だが Butler は、哲学という彼女自身の専門性を発揮して、基盤主義的な思想や性の二分法の徹底的な解体を行った。その意味では、彼女の意図は理論的には達成されていると思われる。しかし、彼女の意図が現実的な意味で達成される(そもそも「達成」という目的論的発想自体が、Butler の議論にそぐわないのだが)には、数々の難点があるように思われる。これらの難点について、以下検討してみたい。

4. 本文献の限界と批判

論点①:Butler の採用する系譜学的相対化戦略に対する内在的批判

本著で Butler が採用している系譜学の方法論は、本来あるべき・回帰すべき真の社会状態を想定したり(疎外論的)、自らの分析の価値中立性・客観性を標榜したり(客観主義)することなく、また自明化された真理が構成される動的なプロセスを安易な社会的要因などを持ち出して説明することなく、それそのものとして描くことにより、私達の生活世界において自明とされている諸事象を相対化することを目的としている。

ここで問題になるのは、系譜学は自らの目的を貫徹するために、「なぜ相対化す

るのか？」「そもそも相対化するのは良いことなのか？」という自己言及的な問いを封印しなければならないということだ。言い換えれば、Butler は系譜学的相対化によって対象の社会的・歴史的構築性について語ることはできるが、系譜学的相対化それ自体の「正しさ」を称揚し、それに向けて人々を動機付ける規範的な主張をすることはできない。 mutulodi!

系譜学は、「非歴史的に真であると思われている言明が、実は言説システムの所産であった」という事実を述べることはできるが、その事実及び事実を分析する行為自体については、「正しい」とも「悪い」とも言うことはできない。

もし、「相対化は正しいことだ！なぜなら、そこに多くの人々にとって抑圧的に機能している、解体されるべき<権力>があるのだから」などと素朴な発言をしてしまえば、せっかくの系譜学が台無しになってしまう。系譜学の意義は、権力として意識されていない出来事を「権力」と名指すことによって、それを明るみに出すことにある。その名指し行為がいったん遂行されたならば、その出来事は「権力」などではなく、明示化・顕在化された制度的事実になる。これを無視して「権力があるから、相対化の作業には意義がある」というのならば、系譜学は「多様性を抹殺する権力」という安易かつ一元的な説明変数（仮想敵≒わら人形？）を用いて、考察対象にあらかじめ前提とされた論者の世界観・道徳観を当てはめる、凡庸な議論へと堕してしまう。

すなわち、「言説によって構成される権力が、人々を抑圧しているのだ！」という価値判断のみが、系譜学を批判理論たらしめるのだが、そうした前提を密輸入してしまった系譜学はもはや系譜学ではない。存在の記述から当為命題を導くことはできない。系譜学的相対化戦略が自動的に「権力に対して批判的であること」を保証してくれる（すなわち存在記述:『権力が存在する』と当為命題:『だからその権力は攪乱されるべきだ！』を架橋してくれる）便利な道具である、というのは、最初から権力に対して批判的でありたいという願望・動機を持ったフェミニストや社会学者の、甘い幻想に過ぎない。

Butler の論理展開には、「起源」や「単数形の同士・敵」を捏造することを拒絶する系譜学的相対化戦略を採用しているのにも関わらず、「多様性を抹殺する権力が存在する！」「だからその権力は攪乱されるべきだ！（と言っている様に私には聞こえる）」という Butler 個人の価値判断・存在記述を議論の「起源」及び「単数形の敵」として設定しているところに、明白な矛盾が見られる（設定しなければ議論が進まないではないか、といわれればそれまでだが、そうしたものを執拗に批判している Butler 本人が設定してしまうのはあまりに安易であるし、それまでの議論はいったい何だったのか、ということになる）。

冒頭の言葉を繰り返せば、Butler は系譜学的相対化によって対象の社会的・歴史的構築性について語ることはできるが、系譜学的相対化それ自体の「正しさ」を称

揚し、それに向けて人々を動機付ける規範的な主張をすることはできない。にも関わらず、Butler の主張が規範的なものとして響いてしまうのは、彼女の論理展開の内部に、彼女自身が最も忌み嫌っているはずの「起源」や「単数形の同士・敵」が皮肉にも入り込んでしまっているからであろう。

論点②:Butler の「身体性の捏造の系譜」批判に対する外在的批判

とはいえ、「起源」や「単数形の同士・敵」といった概念・価値判断が密輸入されてしまうこと自体は別に悪いことではないだろう。そもそもそうした概念や価値判断なくしては、議論が先に進まない。問題なのは、そういった概念・価値判断なくしては議論が先に進まない、という現実を直視せずに、ひたすら概念・価値判断がもたらす負の側面のみを強調する Butler の姿勢にあるのではないだろうか(これも戦略的にやっているんだ、といわれればそれまでだが、Butler 本人が、p24 で「戦略は常に、それが意図している目的を超える意味を持ってしまう」と戦略的に振舞うこと自体の政治性について言及しているので、批判する価値はあるだろう)。

確かに「起源」「敵」「代表」という概念が政治的に問題含みなのは理解できるが、現実にはそれらの概念なくして行動するのは不可能だ(別に Butler は行動しろ、とは言っていないかもしれないが)。Butler のいう「差異の政治」、すなわち文化的差異に目をつぶるのではなくそれらの多様性を固持しようとする政治が、現実政治の場面で具体的なイニシアティヴをとれる可能性は、残念ながら低い。Butler は「『女』という主体がどこにも前提とされない場合にのみ、『表象/代表』はフェミニズムにとって有意義なものになるだろう」(p26)と語るが、現実の政治で多数を勝ち取ることができるのは、「仲間」「代表」「共通目的」「共通利害」というレトリックだけだろう(既存権力の支配下=現実の政治で多数を勝ち取る必要は無い、とButler は言うかもしれないが)。

Butler の議論は良くも悪くも完全主義的、すなわち現実的な実効性云々よりも理論的な純粋性・無謬性・万人に対する非抑圧性を追求しているように思える。この本質主義的な理論・概念を徹底的に排除しようとする姿勢が(たとえ戦略的なものであるにせよ)、ある意味で「裏返しの本質主義」と映ってしまうのではないだろうか。

彼女の議論が「裏返しの本質主義」と映ってしまう原因は、Butler が理論評価を行う際の立脚点にあると思われる。彼女がある理論を評価する際の基準は、基盤主義や「実体の形而上学」といった本質主義的なものが、その理論の内部に組み込まれているか否か、である。それらが組み込まれている理論は、例えそれが戦略的なものであったとしても(p.67)、「多様性を抹殺する抑圧的なもの」として切り捨てられる。

しかし、実体的なアイデンティティや法の「まえ」に存在する主体、といった本質主義的概念それ自体が、常に抑圧的なものとして機能するわけではない。単に本質主義的な言説や思想が抑圧的に機能する「文脈」があるだけだ。この波及効果の文脈依存性を考慮せずに、本質主義をそれが用いられる社会的文脈から引き剥がして、単独で悪玉に祭り上げることに意味があるとは思えない。そもそも特定の理論を評価するためには、その主張者の意図や、理論が作られた社会的・歴史的文脈への理解が必要不可欠だ。そういった前提を度外視して「万人に対して非抑圧的か否か」「実体の形而上学に囚われているか否か」といった偏狭な尺度で理論を裁くこと自体が、「裏返しの本質主義」ではないのだろうか？Butler を批判するフェミニストの一人である T.Moi は、「Butler は権力を不可侵の『神』の位置においている』と主張しているが、Butler の議論が政治的責任の問題を回避した、言語・権力決定論的な様相をある一面では呈してしまっている（と受け取られてしまう）ことは、事実だろう。

論点③:Butler に対する馬場靖男氏の批判

ルーマンに依拠する経済・社会学者・馬場靖男は、Butler の論理展開を「固定的構造の内側・外側に、流動的な“カオス”を見出して対抗しようとする多元論的な手法は、不毛」と批判する。ここでいう「固定的構造」は基盤主義や男根ロゴス中心主義、「カオス」とは行為遂行性のことを指す。Butler は基盤主義や男根ロゴス中心主義を撹乱する手段として行為遂行性という概念を持ち出すわけだが、自ら述べているように、この行為遂行性自体も既存の権力関係の枠内で規定・構築されている。「カオス」もまたそれが批判する固定的構造同様、一定の構造によって規定されており、他の何かを排除・抑圧することで成立する。よってこうした多元論的手法は「多様性を排除する構造を批判するカオスが排除する多様性を批判するカオスが排除する多様性を…」というように論理的に無限後退するゆえ、不毛、というわけだ。「行為遂行性が固定的構造のもたらす抑圧性を撹乱する、というのは理解できるが、今度は行為遂行性それ自体が新たに抑圧的なものとして機能するだけでは？」という疑念。Butler もこの程度の批判は分かった上で言っているのだろうが、Butler の持ち出す「カオス」すなわち行為遂行は、何らかの新しい理想状態に向かって、権力の配置を意図的に方向付けることはできない。目的論的理解を排除した行為遂行の結果がどうなるかは、（Butler に言わせれば）予測不可能である。既存権力関係の組み換え・置換が、必ずしも反権力側にとって有意義・有意味な結果になる保証は、無い。単なる抑圧の拡散・さらなる不可視化・隠蔽をもたらすだけかもしれない。

論点④:Butler の結論に対する外在的批判(自信無し)

Butler の依拠する(とされている)ラディカル・フェミニズム(の一部)は、既存体制の枠組みを与件として認め、その中での男女平等を求めるリベラル・フェミニズムを「改良主義的」と否定し、既存体制の枠組みそれ自体を批判することに勤しんできた。そのためラディカル・フェミニズムの「敵」は、現実的・具体的な人、物、制度ではなく、「権力」「本質主義」「男根ロゴス中心主義」等、どこにあるとも見当のつかない哲学的・抽象的なものとなった。

こうした潮流の「最先端」に位置づけられる(とされている)Butler の結論を要約すれば、「アイデンティティの首尾一貫性やそこから生み出される『主体』や『解放』といった概念は、権力の内部で相互作用的・行為遂行的に構築される実体の無いものであり、誰も権力の外側に出ることはできない。よって権力の外側にありもしない理想郷を描くのではなく、権力の内部で力関係を撹乱・置換・組み換えることで、多様性を生み出していこう」となる。

しかし、これは一部のラディカル・フェミニズムが今まで散々否定していた、既存体制の枠組みを与件として認める「改良主義」そのものではないのか？さらにいえば、「主体・解放といった概念の恣意性や排他性」や「権力の外側に出ることの不可能性」などは、とっくの昔に分かりきっていたことではなかったのか？そうした「原罪」を踏まえた上で、現実的・個別具体的な問題を解決するために、あえて既存体制の枠組みを与件として認めてきたのが、ラディカル・フェミニズムが批判するリベラリズムでありリベラル・フェミニズムではなかったのだろうか？よって私には Butler の理論の「革新性」が(無論私の不勉強のせいだが)いま一つ理解できなかった。

参考文献

北田暁大『責任と正義　～リベラリズムの居場所～』(2003:勁草書房)
竹村和子『"ポスト"フェミニズム』(2003:作品社)
竹村和子　『フェミニズム』(2001:岩波書店)
洋泉社 MOOK『子犬に語る社会学・入門』(2003:洋泉社)
渡辺幹雄『リチャード・ローティ　ポストモダンの魔術師』(1999:春秋社)

★付録：試験に出るバトラー単語★

「一読難解、二読不可解」の『ジェンダー・トラブル』を理解し、議論が盛り上がるよう定義集を作成してみました・・・というのは建前で、本音は語句の定義に関する突っ込みを事前回避する個人的かつ防衛的な狙いです。

【Agency】・・・行為媒体、行為主体、行為体と訳される。Butler の理論の中核をなす概念。
言語を使用する行為は、言語によって構成される社会体制を保持することに貢献しつつも、その発話行為の行為遂行性 performativity が生み出す無数のズレによって、思いがけず言語のもつ意味を撹乱する。それゆえ言語によって形成され、なおかつ発話行為を行う行為体 Agency に、Butler は社会変革の契機と希望を見出した。

【主体】・・・従来、主体は「自律的な絶対性を持つもの」とされ、フェミニズムにおいては「女」の主体性の獲得の是非が議論の争点になってきた。ところがポスト構造主義の潮流の中で、「自己は既存権力＝言語によって構成される社会的な規範・規律を内面化することでしか主体たりえない（主体化＝隷属化）」という見方が強まる。「主体」が言語以前に存在しないのであれば、言語によって構成される社会の規律・規範に抵抗することはできないのではないか？この問いに一つの答えを出したのが本文献『ジェンダー・トラブル』である。

【異性愛のマトリクス】・・・Butler はセックス（解剖学的性差）が社会的・文化的性差としてのジェンダーを生み出す、という考え方を反転させて、ジェンダーに基づいてセックスが産出され、さらにジェンダーを通して強制的異性愛の実践が正当化されていると述べ、これを異性愛のマトリクスと名づけた。異性愛のマトリクスの下で、セックスとジェンダーは一致し、異なるセックスとジェンダーを欲望の対象とするという身体の首尾一貫性が生み出される。

【強制的異性愛】・・・自然で個人的な好みだと一般的に考えられている異性愛は、男による女の支配を容易にするために社会によって押し付けられている政治的制度である、という考え。

【クィア理論】・・・1990 年代に登場した、クィア queer（変態）という侮蔑語をあ

えて引き受けることによって自己主張をする理論。安易な性差二元論を批判し、異性愛や同性愛といったカテゴリーを越える横断的立場を模索する。

【ホモソーシャリティ】・・・同性社会集団。異性愛男性同士の友情・同胞愛によって支えられた連帯関係を指す。

【男根ロゴス中心主義】・・・性的差異こそあらゆる差異のうちで最も根源的であり、ファルス（＝男根）はあらゆる意味作用の根源となる、とするラカンの立場を批判的に呼ぶ際の名称。ファルスは意味の根源とされながら同時に欠如の記号でもあるので、「ファルスの権威」に対する闇雲な批判は空虚なファルスの権威を追認してしまうことになる。ゆえにファルス批判＝男根ロゴス中心主義批判は困難を極める。

【ジャック・ラカン（J.Lacan)】・・・フランスの精神分析家。ラカンの理論は臨床以上に思想として普及し、鏡像段階論を取り入れたフェミニズム理論も発達。フェミニズムによるラカン理論の「誤読」を批判する哲学者ジジェクは、バトラーらと共著「偶発性・ヘゲモニー・普遍性」（青土社）を発表している。

【リュス・イリガライ（L.Irigaray)】・・・ベルギー出身、フランス国籍の哲学者・精神分析学者。鏡に映る男の主体確立に対して鏡の役割を当てられてきた女の表象を再検討、ファルス中心主義的な哲学の言説を批判した。

【モニク・ウィテッグ（M.Wittig)】・・・レズビアンフェミニストかつラディカル・唯物論フェミニスト。フランスの女性解放運動に参加。ジェンダーの定義は必然的に男女のカテゴリーを残すため、新たなカテゴリーとしてレズビアンを創設する必要があると主張。

【物象化】・・・人と人との関係が、当事者たちの意識に、物象のように客観的に現れる事態。

いずれの定義も竹村和子『“ポスト”フェミニズム』(2003：作品社）による。

★付録：上野ゼミサヴァイバル心得・六箇条★

上野ゼミに在籍していた、ということが、生涯の財産になるか、それとも生涯のトラウマになるかは、ひとえに個々人のリスクヘッジ・スキルの巧拙に依存すると思われる。付録ではそうしたスキルを大喜利風に列挙してみたい。

う：鬱と友達になる！

これが最優先課題。渾身の力を込めて作成したレジュメが、公衆の面前で秒殺されると、生きる意欲が完全に蒸発する。特に発表の前後・レスポンスカードの読後は重度の鬱に罹る可能性が大（私は毎回罹りました）なので、何らかの個人的な鬱解決策を事前に準備しておくと、気休めにはなるかもしれない。

え：英語と友達になる！

「それを英語で言い換えるとどうなりますか？」という上野先生必殺のキラーパスを迎撃すべく、発表で用いるキーワードの英訳は事前に準備しておくと安心（私は事前に英訳を準備したにも関わらずそれが誤訳であり、墓穴を掘りましたが）。

の：納期は断固死守する！

税金、ではなく提出物の納期は厳守。納期日以後は、単位と生命の保障に赤信号が点滅。

ち：遅刻は如何なる手段を用いてでも回避する！

自分が発表担当の日に正当な理由なく遅刻すると、目を背けたくなるような惨劇の主人公になる危険性大。五分前出席を心がけると無難。

づ：図星を突かれたら開き直る！

無駄な抵抗は戦況を悪化させるのみ。素直に降参し教えを乞うのが得策か。

こ：言葉責めは、むしろマゾヒスティックに味わう！

これは不器用な先生の、私に対する屈折した愛情表現なのだ、と無理矢理自分に言い聞かせる。